

この恋はスベってる

脚本…永井茜

1. マンション・カナミの部屋

ローテーブルの上の小物入れに、マスクが束で入っている。

カナミ(29)、マスクを手に取って装着する。鞆を持って玄関へ、その最中にイヤホンをつける。

YouTubeを開き、カリプソの自主ラジオ、『深海ラジオ』を再生する。

キムラ(29)とタジマ(30)の音が流れてくる。

タジマの声 「今週もはじまりました、カリプソの『深海ラジオ』。カリプソのタジマです」

キムラの声 「同じくキムラです」

カナミ、家を出る。

2. 歩道

俯きがちに歩くカナミ。

キムラの声 「今週ね、ようやく漫才やれましたね」

タジマの声 「いやもう、久しぶりすぎてね。コロナ明け一発目のライブだから、芸人全員ガッタガタで」

キムラの声 「何がびっくりしたって、こんなご時世だつてのに出待ちの客がいたことだよ。名前は出さないけど、俺たちじゃない別の出演者目当ての」

タジマの声 「ああー、まあ確かにいましたね」

3. 踏切

カナミ、踏切が開くのを待っている。

キムラの声

「ライブの注意事項にも書いてあるからね、出待ち差し入れ禁止って。今どういう状況か本当にわかってんのかって。むしろこういう状況でなくても出待ちなんかすんな！」

タジマの声

「あなた出待ち対応とかできない人ですもんね」

キムラの声

「できないとかじゃなくて、嫌なの俺は。ネタで勝負できないクソつまんねえ芸人が、出待ち対応とかSNSとかで必死にサービスして、少ないファンにしがみついている浅ましい姿を見るのが」

タジマの声

「やめてください、誰のこと言ってるんですか」

カナミ、笑いをこらえている。

4. カラオケボックス・外観

扉の前にコロナ対策の注意書きが張られている。

5. 同・個室

バイト中のカナミ、辺りにアルコールを振りかける。

廊下を通ったバイト中のユウジ(18)、扉の窓越しにカナミを見る。

6. 同・通路

中を覗くユウジの横を、社員のミズキ(29)が通りかかる。

ミズキ

「ユウジくん、どうかした？」

ユウジ

「あ…。清掃入ろうと思ったら、カナミさんがやってきてて」

ミズキ

「あ、そうなの？ カナミちゃんって、いつも気が付いたら清掃入ってるね。せめて一声かけてくれればいいのに」

ユウジ

「あははは…」

個室の中のカナミを見つめる。

同・休憩室

休憩中のカナミ、ラジオの続きを聞いている。

タジマの声

「ハイ、続きまして」

キムラの声

「ハイ」

タジマの声

「件名『コロナ明け一発目、幸先のいいメール』」

カナミ

「！」

目を輝かせる。

タジマの声

「童貞の癖にフェミニストのタジマさん、キチガイレイシストのキムラさん、こんばんは」

キムラの声

「(笑いながら)誰がレイシストだよ、むしろ人権派だわ」

タジマの声

「(笑いながら)ステイホーム中の子供たちの為、著作権を無視してでも絵本の読み聞かせ動画を上げるクソ偽善者どもが跋扈する昨今、いかがお過ごしですか」

キムラの声

「あはははは！」

タジマの声

「口が悪いなあ！ えー、深海ネーム、エリエリラマサバクタニです」

キムラの声

「おーバクタニさん」

ユウジが飲み物と食事片手に入室してくる。

ユウジ

「カナミさん、お疲れ様です」

カナミ、ユウジに気づくと会釈して、ラジオに集中し直す。

ユウジ、カナミを気にしながら食事を取り始める。

タジマの声

「コロナ明け最初のド地下ライブ出演、おめでたいですね。今はこういうご時世ですから、出待ちのカキタレ馬鹿女とパコる時には、チンポの先からケツの穴の中まで、全身くまなく消毒してくださいね」

キムラの声

「(笑いながら)しねえわ！」

タジマの声

「それはさておき私の近況ですが、自粛が明けてカラオケでのバイトが再開しました。カラオケの個室でパコる偏差値2の低学歴カップルを注意する日々が戻ってきたと思うと、感慨深いです」

キムラの声

「パコパコの話ばっかだな！絶対こいつ童貞だわ」

カナミ、吹き出す。

ユウジから変なものを見るような目で見られ、カナミ、慌てて休憩室から出る。

タジマの声

「お二人もコロナと性病には十分に注意してください。これからも応援しています」

8. 同・通路

足早に歩くカナミ、空いている個室に入る。

キムラの声

「いつもありがとね、バクタニさん。逆に童貞臭さにじみ出るから、あんまりパコパコ言わない方がいいよ」

9. 同・個室

個室へ入ったカナミ、飛び跳ねて叫び出す。

カナミ

「読まれた！読まれた！読まれたー！」

ソファに寝転がり、じたばた暴れる。

カナミ

「キムラさんが笑ってくれた〜〜！」

しばらく暴れて、急に大人しくなる。

ニヤニヤが止まらない、緩みきったカナミの顔。

カナミ

「キムラさん、好き〜…!」

10. マンション・外観(夜)

11. 同・カナミの部屋(夜)

ベッドに横になりながら、ラジオを聴く部屋着姿のカナミ。

キムラの声

「でもさあ、俺らがライブでちよつと不謹慎なこととか言う時、何も反応しないMCとかいるじゃん」

タジマの声

「あー、いますね、まあ」

キムラの声

「ちゃんと面白い芸人はどんなボケしても拾ってくれるのにさ、インディーズで長年腐ってるだけのくせにベテランぶって、女の客に媚びてフォロー稼ぐことしか考えてねえヤツに限って、そういうところで保身しやがんだよ。ツツコンでこいよ！お笑いやる気あんのかってんだよ、腹立つ」

タジマの声

「(笑いながら) そういうこと言ってるから地下ですら嫌われんだよ」

カナミ

カナミ、ケタケタ笑いながら、じたばたする。
「でも私はそういうところが好き…!」

ラジオの音声が途中で途切れ、着信音が鳴り出す。

カナミ、途端に表情が暗くなり、重たい手つきで電話に出る。

カナミ

「(低い声で)…はい」

ミズキの声

「もしもし、カナミちゃん？ あの子、明日って暇？」

カナミ

「…特に予定はないですけど…」

ミズキの声

「あ、本当？ 実はさ、出勤予定だったタカノさんが、咳が止まらないとか言うもんだからさ。ごめんんだけど、代わりに出勤してもらっていい？」

カナミ

「…わかりました」

ミズキの声

「ありがとうー！ それじゃよろしくですー」

電話が切れる。

カナミ、深く溜息を吐いて、ラジオを再生し直す。

キムラの声

「そうは言うけど芸人なんて嫌われてなんぼですからね。俺は誰かに好かれようと思ってお笑いやってないの、お前と違って」

カナミ、再びじたばたして、

カナミ

「キムラさん、かつこいいい〜…！」

12. 階切

バイトに向かうカナミ、スマホから通知が鳴り、立ち止まって確認する。

ロック画面に、キムラの「ご報告」というツイート通知。

カナミ、笑顔でスマホを弄りだすが、途端に表情が凍り付く。

画面に映る、キムラの「解散のご報告」というメモ画面のスクショ。

警報機の音が鳴り出し、踏切が降りて、電車が通りすぎる。電車が通りすぎ、踏切が開いても、カナミ、その場から動けずにいる。

その間、画面にキムラの解散報告の文章が浮かび上がってくる。

『この度、相方のタジマが結婚を機に芸人を辞めて就職することになりました。それに伴い、カリプソは今月末を持って、解散します。最後のライブとして、7月26日に秋葉原ZERO・Gにて深海ラジオ最終回公開収録を行いますので、よければ皆さん来てください。今までカリプソを応援してくださった皆様、本当にありがとうございました。』

カナミ、呆然とスマホを見つめている。

手に持つスマホの画面には、『なお、僕の今後の活動に関しては未定です』の文字。

カナミ

「……」

18 カラオケボックス・個室

バイト中のカナミ、未だに呆然としてソファに横たわっている。

扉が開き、ミズキが入ってくる。

ミズキ

「カナミちゃん…(カナミに気付き)うわあつ。どうしたの？ 体調悪くない？」

カナミ、社員に気付くとのろのろと起き上がる。

カナミ

「すみません、ちょっと気分悪くて」

ミズキ

「ええ？ 体調悪いなら来ちゃダメでしょ！ もしコロナだったらお客様に迷惑かかるんだよ！」

カナミ

「…すみません」

「カラオケボックス付近の歩道

とぼとぼ歩くカナミ、その後ろからユウジが追いかけてくる。

ユウジ 「カナミさん！ これ、休憩室に置きっぱでした」

イヤホンを手渡す。

カナミ 「…ありがとう」

ユウジ 「体調、大丈夫ですか？」

カナミ 「…ごめん、実はどこも悪くないの」

ユウジ 「え？ …なんだ、カナミさんもサボったりするんですね、なんか意外」

へらへら笑っていたが、ふと意を決したように、

ユウジ 「…あの、俺さっき休憩入ったところで。ちよつとお茶しませんか？」

15. 公園

ベンチに間隔を空けて座り、缶ジュースを飲むカナミとユウジ。

ユウジ 「なんか、もどかしいですよね、ソーシャルディスタンス」

カナミ 「ああ…うん…」

しばしの沈黙が流れる。

ユウジ 「…あの、カナミさんって彼氏とかいるんですか？」

カナミ 「え…いないけど」

ユウジ 「あ、そうなんです。…彼氏にするんならこういうタイプとか、ありますか？」

カナミ、考えるそぶりを見せる。

カナミ

「…自立心が強くて、他人の意見とかに左右されなくて、信念を守るためなら周りとはぶつかることもできる、自分の中に1本芯が通ってる人」

ユウジ

「…やけに具体的ですけど、もしかして、好きな人とかいます?」

カナミ、ユウジから目を逸らす。

ユウジ、カナミの反応で悟る。

ユウジ

「いるんですね…」

カナミ

「…でも、望み無いから」

ユウジ

「…それで今日、元気なかつたんですか?」

カナミ、気まずそうに黙る。

ユウジ

「(わざと明るく)まだわからないじゃないですか?。最初からそんな諦めたふうなの、よくないですよ。…俺は、カナミさんのこと…。いいな、って思いますけど…」

カナミ

「…」

俯く。

カナミ

「もしも、好きな人に二度と会えなくなるかもしれない、ってなったら…。ユウジくんなら、どうする?」

ユウジ、一瞬驚くが、すぐに真剣な表情になつて、

ユウジ

「そうですね…。やっぱり、自分の想いだけはちゃんと伝えたいですね、俺は」

カナミ

「…」

「9」 マンション・カナミの部屋(夜)

カナミ、ベッドに腰掛け、深呼吸してからスマホを操作してDMを送る。

『キムラさんへ。7/26の公開収録、カナミで1枚取り置きをお願いします。』というDMが、キムラ宛に送信されるのが画面に映る。

深く溜息をついていると、すぐに通知音が鳴って、カナミの身体が強張る。

キムラから『こんばんは。7/26の公開収録承りました。よろしくお願い致します。』と返事が来ている。

カナミ

「こんばんは…」

カナミ、まじまじと画面を見つめ、ベッドに倒れ込んでじたばた悶える。

カナミ

「『こんばんは』って！キムラさんが、わざわざ『こんばんは』って言ってくれた！キムラさん、好き〜！」

11 秋葉原駅・ホーム

走る電車、駅名看板、雑踏の群れ。

12 秋葉原・歩道

お洒落な格好をして、マスクをつけているカナミ、スマホを見て道を確認しながら、会場へ向かっている。

すると、秋葉原ZERO・Gの看板を見つけ、歩み寄る。

傍の建物を見上げると、二階の窓に大きく書かれた会場の名前。

スマホのインカメラで髪型を確認し、少し直してから、緊張した面持ちで会場に足を踏み入れる。

19. 秋葉原ZERO-G

カナミ、階段を上ってきて、受付に声をかける。

カナミ 「取り置きをお願いしていた、カナミです」

受付、名簿を見ながら、

受付 「カナミさんですね。二千元になります」

カナミ、料金を支払い、受付に頭を下げて奥へ。

ステージと、間隔をあけてまばらに設置された客席。

カナミ、一番後ろの端の席に座る。

× × ×

照明が消え、出囃子の音楽。

ステージの照明が点き、キムラとタジマが登場する。

タジマ 「どうもー！」

いっせいに拍手の音。

タジマ 「この度は僕たちカリップスの最後のライブ、深海ラジオの公開収録に来てくださってありがとうございます！」

キムラとタジマ、一礼する。

カナミ、キムラを見つめる。

× × ×

ステージに椅子が置かれ、座って収録しているキムラとタジマ。

タジマ 「最終回だからね。今日は来てるメール全部読もう」

キムラ 「うん」

タジマ、スマホを見ながら、

「それじゃあ、まず1人め。件名『寂しさで枕を濡らしながら書いたメール』」

カナミ、少し身じろぐも、平静を装う。

「どうせ出来ちゃった婚のタジマさん、DV常習犯のキムラさん、こんばんは。深海ネーム、エリエリラマサバクタニです」

「お、バクタニさん」

「まずはタジマさん、ご結婚おめでとうございます。永住権目当ての外国籍の奥さんと末永くお幸せに。ちげえわ！うちの嫁は日本人です！」

キムラ、客、笑う。

「そしてキムラさん。私がメールを送れるのも、これが最後になるかもしれないので、今回ばかりは冗談抜きの本音を記そうと思います」

カナミ、キムラを見つめている。

「私は深海ラジオが大好きでした。周りのことなんか気にもせず、ただ自分が面白いと思うことを突き詰めて、結果的に悪口しか言わないキムラさんのスタンスが、とても好きでした」

「…」

「キムラさんに面白いと思ってもらいたくて、本当は虫も殺せないか弱い乙女なのに…」

「えっ、バクタニさんって女の子だったの？」

「虫も殺せないか弱い乙女なのに、キチガイみたいなメールを送り続けてきました」

「うそお？ か弱い乙女じゃないよ、絶対にキチガイだよ、あなたは」

カナミ、笑う。

タジマ

「現段階では、キムラさんが芸人を続けるのか、辞めるのかもわかりませんが、私は今のブレないキムラさんのことが心から好きです。どうかコンプラの波に吞まれて溺死する日が来たとしても、自分の信じるお笑いに殉じてください」

キムラ

「ふふふ、死ねって言ってんじゃん、厳しいなあ」

カナミ、キムラを見つめている。

タジマ

「バクタニはいつまでも、キムラさんのことを想っています」

キムラ

「…いやあ、アツイなあ」

タジマ

「いいなあ、俺なんか嫁を永住権目当ての外人扱いされてるのに」

観客から笑い声。

キムラ

「でもほんと、いつもメール送ってくれてね、バクタニさんは。ありがたいよ」

タジマ

「そうだね。ヘビリスナーだから」

キムラ、客席を見渡せて、

キムラ

「ひょっとして、今日来てたりすんのかな、バクタニさん」

カナミ、ぎよっとする。

キムラ

「お客さんに、もし本人ですよって方がいたら、手上げてもらっていいですか？」

観客ら、客席を見渡す。

カナミ、キムラを見つめ、手をぎゅっと握り締

め、少し力を緩める。

その時、キムラと目が合う。

カナミ

「…」

カナミ、再び手を握りしめる。

2人の視線が違える。

キムラ 「なんだ、来てないのか」

タジマ 「まあこんなご時世だしね」

キムラ 「どんな人か気になってたんだけどね」

カナミ、少し俯く。

カナミN 「件名『誰にも届かないメール』」

× × ×

ステージの上で漫才を披露するキムラとタジマ。

カナミ、その姿を見つめている。

カナミN

「相方を寝取られたキムラさん、こんばんは。深海ネー
ム、エリエリラマサバクタニです。キムラさんに謝らな
ければならないことがあります」

20. 秋葉原・歩道(夜)

とぼとぼと帰路につく、カナミ。

カナミN

「公開収録の時、私はあの場にいました。カリプソの最
後の姿を、キムラさんを、ずっと見ていました。でも、
寸でのところで怖気づいて、名乗り出ることができませ
んでした」

21. 電車(夜)

カナミの住む町へ向かって走る電車。

カナミN

「私、カナミっています。奏でるに美しいと書いて、カ
ナミです。普段はまともな女子大生ヅラしてますけど、
心の中では普段メールで送るようなことばっかり考えて
るんです」

電気がつき、カナミが帰宅する。

荷物を放って、マスクを外す。

あらわになる泣き顔。

そのままベッドに腰掛け、抱き枕を抱きしめる。

カナミ N 「…このメールを送る勇気があったなら。あの時、手を挙げる勇気があったなら。私をもっと単純で、厚顔無恥で、自意識過剰な人間だったなら。もっと簡単に生きる事ができたのでしょうか」

抱き枕に顔を埋め、寝転がる。

× × ×

昼になっている。

カナミ、ベッドで眠りこけている。

カナミ 「うーん…」

手探りでスマホを探し、手に取ると画面を見る。

カナミ 「昼じゃん…」

スマホをしばらくいじり、驚愕する。

キムラの「昨日の公開収録ありがとうございます。僕はまだ芸人続けることにしました。いつかコンプラの波に吞まれて溺死するその日まで、引き続きよろしくお願いします」というツイートを。

カナミ、勢いよく起き上がり、スマホの画面を見つめる。

カナミ 「(言葉にならない叫び)」

23. 同・玄関口

カナミ、家から飛び出す。

カナミ

「キムラさん！」

エレベーターに駆けていき、ボタンを押すが、待ちきれずに階段の方へ。

24. 同・階段

階段を駆け下りてくるカナミ。

カナミ

「キムラさん！」

25. 道

ユウジ、スマホを弄りながら歩道を歩いている。

すると前方から、カナミが疾走してくる。

ユウジ

「カナミさん？」

カナミ、ユウジに振り向きもせず走り去る。

ユウジ

「カナミさん!?!」

道を走り抜けるカナミ。

カナミ

「キムラさーんっ……!?!」

26. 跨線橋の上

呼吸を荒げ、立ち止まって息を整えるカナミ。

カナミ

「キムラさん……」

その場にへたり込み、泣き始める。

カナミ

「(嗚咽)」

しばらく泣き続け、溜めに溜めてから、

カナミ 「好き！好き、好き好き好き好き好き……っ！今度こそ絶対に売れて、バイトなんか辞めてお笑いだけでご飯食べれるようになって……っ！でも、安いテレビバラエティに消費されるんじゃないかって、ネタもちゃんと評価されて、単独チケット即完してメルカリで5万で転売されるぐらいの凄い芸人になって、いつか芸能人の奥さんとかと結婚して、私のことなんか気にもかけない一流芸能人になって……っ！！！」

少し落ち着くが、すぐに思い出したように、

カナミ 「あつ、でも変な三流アイドルとかと結婚するのはやめて……！！嫁に変なイジられ方されたり、嫁が書いてる中身の無いうっすいブログの記事とかで変なあだ名つけられてるところなんて、死んでも見たくない！」

立ち上がり、遠くに向かって叫ぶ。

カナミ 「いつまでも今のままのキムラさんでいて……っ！でも、今後丸くなって今みたいな尖りが無くなったとしても、それはそれでやっぱり好き……っ！」

カナミを追ってきたユウジ、奇妙な顔でカナミを見て、

ユウジ 「…わっかんねえわ…」

橋の下を、電車が通りすぎる。

27. 秋葉原 ZERO-G

明転した舞台上に登場する、キムラと、新相方のサクマ (35)。

サクマ 「どうも……」

観客から一斉に拍手の音。

キムラとサクマ、客席に軽く頭を下げる。

キムラ、その時、1人の客(カナミ)と一瞬目が合うが、すぐに正面を向く。

キムラ 「どうも。バツイチ、傷物同士でコンビ組んでます」

サクマ 「いきなりなんてこと言うんですか」

笑い声。

サクマ 「元カリプソのキムラと、元月蝕のサクマで、ゲリラと申

します。よろしく願います！」

キムラを見つめて拍手を送る、カナミの後ろ姿。

エンドロール